

## 雲岡第18窟について

—仏龕を中心に—

熊坂聡美（筑波大学・日本学術振興会特別研究員）

雲岡石窟第18窟は460年代に造営された「曇曜五窟」のひとつであり、第20、19、17、16窟同様、大仏像が石窟空間の中心を占めている。ただし本窟の場合、特殊な造形的特徴を示す主尊がこれまでも注目され、その尊格が議論されてきた。具体的には盧舎那仏とする説と、釈迦仏とする説の大きく分けて2つの見解が存在する。しかしその議論において、身体に無数の化仏や化生の刻まれる主尊の表現と関連すると見られる中央アジアの作例や、同窟内の十大弟子像との関係が検討されることはあったが、主尊仏立像を取り囲む壁面に数多く刻まれている仏龕の存在にはほとんど注意が払われることがなかった。

それはなぜか。第一に、それらの仏龕の中に石窟開鑿当初の作例以外の追刻造像が多数含まれており、460年代の壁面の状況を知ることは困難である。第二に、仏龕の発願者は恐らく互いに無関係な貴族や庶民の集団（あるいは個人）であると考えられる。そして石窟そのものが皇室主導で造営されたという事実を鑑みるに、庶民による小像が皇室による大仏像と共に構成されたものとは考えにくいとする見方が暗黙の了解と化していたためである。

しかしながら、一部の仏龕は開鑿当初の作とみられ、第18窟には特に二仏並坐像が多いなどの特色が認められる。さらに配置の上でも、比較的大型の二仏並坐像龕を水平に並べるなど一定の規則性が認められた。そこで筆者は本窟内の仏龕に注目することで、主尊の尊格の問題も含め、本窟の図像プログラムを知る手がかりを得ることができるのではないかと考えた。

本発表においては、まず第18窟に関する先行研究の動向を確認する。次に石窟開鑿当初の仏龕（以下、初期造像と呼ぶ）と追刻造像との相違を示し、曇曜五窟初期造像全体の中での第18窟仏龕の位置づけを、手順を示しながら明らかにする作業をおこなう。また、本窟に見られる十大弟子像と特に好まれた仏龕の尊像（二仏並坐像）との関係を通して本窟の図像プログラムについて検討していく。

仏龕を様式、形式の両面から分析した結果、雲岡第18窟には曇曜五窟中最も多く初期作の二仏並坐像が確認され、他窟の二仏並坐像の場合よりも仏龕形式のバリエーションも豊富であることが理解された。特に尖拱額内に千仏を刻むという、それまでには見られなかった新たな形式がここで採用され、主尊の身体に刻まれた無数の千仏と造形上密接な関係があるものとみられる点は重要である。また第19-1窟などにも見られる二仏並坐像の脇侍として比丘像を配する例は第18窟でも採用されるが、そのような組み合わせは『法華経』の中心思想と関連があり、十大弟子像を本窟に刻む背景となった可能性がある。